
東方交差人

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方交差人

【Nコード】

N 6 2 3 6 M

【作者名】

作者月詠

【あらすじ】

「とうほう まじわりびと」 輪廻の輪から外れた主人公が色々有って幻想郷になる前の幻想郷へとやってきた！しかも手違い（という故意）で不老不死に！？ 作者はネタが思いつき次第他を更新します（汗）

第一交差 転生という名の受肉（前書き）

懲りずに東方第二弾！

イテテ！石投げないで！

第一交差 転生という名の受肉

ここは、何処だ？

体が動かない。

むしろ体が”無い”と、認識は出来る。

視界の端に 目が在るかどうかは置いておく 映るはずの顔の
パーツも無い。

白…？いや、『透明』だからこそ色が無いのか…

考える前に脳味噌も無いくせにと自ら自分を皮肉るが、結果は虚しいだけだった。

すると声が聞こえてきた。

「ほう…これは珍しい。このような場所にあなたの様に自我を持った魂が来るとは…」

声色は幼い少女の様だが、何処か慈悲深かくも僅かながらの覇気を
感じる声だった。

誰だ？

” は問うた。

「ここは『輪廻の輪』の壁を挟んだ内側：所謂、『管理者の間』と
称される場所。

あなたの様に『ここ』に迷い込む魂は千年に一度在るか無いかでし
よう」

と少女の声は軽い驚愕と多少困った風に言う。

魂？俺は死んでいるのか？

” は再び問う。

「自覚無し…ですか。

『ジョウハリのカガミ浄玻璃の鏡』によると罪状、善行も共に±0…良くも悪くも『普
通』ですか」

と感心したように語る少女の声。

待て…浄玻璃の鏡だと？

あの鏡は閻魔大王が生前の行動を映し出す鏡だったはず…もしやこ
の少女（の声）は…

「あなたの考えた通り、私の役職は『閻魔』です。

今日は偶々こちらを覗きに來たらあなたが居たという訳です」

やれやれ…と言った風に語る少女改め閻魔の声。

…一応口調を正した方がいいのだろうか？

「大丈夫ですよ。そのまま結構です。

どうせ今日の仕事は終わりましたし、何より気紛れでここに来たので」

語尾に『 が付きそうなくらいクスクスと笑う閻魔（の声）

…さいで。何も見えないが声は聞こえる。

触れられないが感じられる。

動けないが考えられる。

生前の当たり前だった事が出来ないとなると意外に不便だ。

そう考えていると今までとは違う声がやってきた。

「これは閻魔殿。ここにいらつしやるとは珍しい…何か御用で？」
えらく渋くダンディーな声だった。

「ケルス管理者…いえ、暇潰しに覗きに来たのですが、この方が…」
どうやら知り合いらしい。

管理者…ここの主任だろうか？

突然ふわり…と浮かされた感覚が起こる。

「ふむ…輪廻の輪から外れたか。

ふむふむ…かなり純粹かつ混ざり合った魂だ…。

矛盾した魂か…これは珍しい」

唐突に悪寒が走ったのは気のせいだろうか？（汗

「閻魔殿、この魂を『転生』させては如何だろうか？」

突然何を言っているのだ、こいつは？

「な…、あなたは何を言っているのか解っているのですか！？」

『特例』以外の転生は重罪中の重罪ですよ！？あなたはそれを一番理解しているはず…「だからさ、閻魔殿」ケルス管理者…？」

ケルスと呼ばれた男の問いに焦りを剥き出しに怒る閻魔。

…やばい、シリアスだ。

「この魂は特例中の特例。

平行世界のこいつの魂までも混ざりこんでる…このまま輪廻を果たせば、いずれ顕界は破滅する。

『幻想郷』ゲンソウキョウならば扱い方も解るだろう」そう言って閻魔を説得するケルス。

「仕方が無いでしょう…しかし、『閻魔王』は…」
渋る閻魔。

トップが閻魔王…厳ついイメージしか湧かないな。

「その時はその時だ」

『そんな時は諦める』と言わんばかりに笑うケルス。

え？何それこわい。

ー不安たつぷりだぞオイ！

「なかなか喋らないものだから空気化していたぞ？」

『ああ、居たの？』と言わんばかりにニヤニヤと笑うケルス。

ずっとモノローグで頑張ってたわ！！

べ、別に構ってくれなくて淋しかったとか思わなかったんだからね
！！

「あなた…ツンデレでしたか」

閻魔さん言わないで。俺の心が危険値デットラインだから。

*

なんやかんや有って受肉（魂に肉体を与える事）させていただき、瞬きした瞬間には湖の前ですよ。

ちなみに、閻魔さんはやつぱりって事で山田こと四季映姫さんでした。

そしてケルスこと本名、ケルベロス・フォトンブラッドさんはスークそっくりでした。そりゃダンディーな訳だ。

現在の服装は濃紺の和服（着流しとも言う）。

湖を覗き込んで容姿を確認すると、紫混りの銀髪で薄灰色で切れ長の目をしたイケメンさんでした。

閻魔王：あんた良い人だわ（泣

第一交差 転生という名の受肉（後書き）

やっちまっ たよ俺…

どーすんだよ…ちくせう…

第二交差 科学の音色に凍てつく影（前書き）

一応能力伏せたけど、多分判るかな？

主人公の能力：（ - A - ；

第二交差 科学の音色に凍てつく影

問おう、貴方がわたさーじやなかった。

読者諸君に問いたい…

俺は…

「どうしてこうなったああアアアアア!!」

「ガオ、オオオオオオンツ!!!」

本当にどうしてこうなった…

ー遡ること十分前…

生存知映姫さん

山田とスーク似のダンディーなケルベロス・フォトンブラッド、

略称ケルスさんによつて特例的な転生をさせられた。転生かー、と

転生前

ファンフィクション

生前に読んでいたFFとかSSとかでテンプレだったが…（ちなみ

に山田こと映姫によると、俺は生涯ボケずに正確そのままに老衰し

たそうだ）：よもや輪廻から外れるとは思わなんだ。

周囲のざわつきから人はいっぱい居そうだけど、いかんせん姿が見当たらない。

さあ、参った参った。

と思った矢先に10m級の大狼が目の前にエンカウト。

逃げ続けて八分、今に至るわけである。

「生き返らせて貰った矢先にあっさり死ねるか！」

そうは言ったものの、いかんせん、良く言えば無手、悪く言えば丸腰である。

周囲のざわめきも想然としている。

コイツらアレか！？妖精か何かか！？クソつたれ！誰か助けてくれよ！人間とて自然のサイクルの歯車の一つたる！

《当たらずとも遠からず、合わない歯車だつてあるじゃないか？》

あん？

俺の左側をスカイブルーの光が並走している。
声の主…恐らく妖精の一人（？）だろうか？

《集合体としては一人だな。若しくは一体だ》

んなこたあ聞いてねエ！

今そんな状況じゃねえだろ！

《そうだったな。少しばかり力を貸そう…この大狼には我ら妖精も被害者でな》

力を貸すってお前…どうやって！？

更に情報を聞き出そうとするが背後からの爪が迫り、思考が中断される。

何とか避けたつもりだったが左腕が僅かに切り裂かれる。

「ぐっ…！！」

《主には類い稀なる【交差】の力を有している！》

聞き覚えの無い言葉に疑問を抱きつつも大狼から必至で逃げる。

「交差！？何だよそれ！」

俺は思わず声に出してしまう。

《心当たりは無いか！？人がおらぬのに声は聞こえ、聞こえるはずの無い声が耳に入ったりなど！》

「心当たり有りまくりだ！それも現在進行系で！！」

《それは我が主に干渉しているからだ！！ええい面倒だ！！体を借りるぞ！》

「ちょっ、何を…っ！？」

何をすると言いきる前に『何か』が俺の体に、魂に入り込む。

そして意識は奥へと引きずり込まれた。

??? Side end...

NO Side??

大狼は愉悦に浸っていた。

逃げ切れるはずもないのに必死で逃げ回る弱者^{エモノ}。

それを追いつくかどうかの速度に『わざと』落とし、焦燥に駆られた弱者^{エモノ}の歪んだ顔を楽しむのが大狼の楽しみの一つ。

目の前を走る人間は何かを喚いている。

妖精が何かを入れ知恵しているだろうが無駄…
そう大狼は嘲笑っていた…

それが現れるまでは…

大狼の前を走っていた少年がこちらに振り返ると同時に、大狼の鼻先と顎を衝撃が襲う。

『多々…いや、少々不本意だが…そうも言っていられないのでな。』

さて巨狼よ…

主の罪を数えるがいい！』

紫混じりの銀髪はアイスブルーに、薄灰色の瞳は翡翠の色へと変色していた。

そして背中には七枚の剣の様な羽。

濃紺の和服は、青と白の大羽織に変化していた。

大狼には、この変化した少年の威圧感には身に覚えが有った。

妖精の中で圧倒的な威圧感を出していた『蒼き氷の妖精』だった。

大狼はその威圧感から逃げ、屈辱を紛らわす為に森を徘徊し、少年を見付け…今に至る。

いつ間違えた？

大狼は思う

何処で間違えた？

大狼は考える。

その間に少年（？）の手には冷気が集まっていく…

『人間にしては奇異な能力の少年だな…クク…少し借りるぞ』
手に集まっていた冷気が一気に強大化する。

『闇より静けき氷海に眠る』』

そして冷気は影にさえ及び、影は人の姿から『巨大な鎧の人型』へと形が変わる。

『「？其は、科学の音色に凍てつく影！」』

それは少年の『齒車の記憶』。
純粹故に白く、何事にも染まる『齒車』を有していた少年の記憶。

そして、影の機神は現れた。

『征くぞ、翡翠^{ひずい}』

???御意????

そして、大狼の意識はここで途絶えた。

??? NO Side end . . .

名前：??????

性別：??????

能力

- ・???と???る程度の能力
- ・?行????交???程度の能力^{アスラクライン}
- ・機巧魔神を顕す程度の能力「NEW」

第二交差 科学の音色に凍てつく影（後書き）

??? 緊急速報??? ?

目を覚ました少年を介抱したのは水色な女性だった。

少年は女性から名を貰い、友を増やしていった。

しかし、闘争の狼煙は少年の日常を遮る壁となる。

次回、東方交差人。

第三交差

「鬼の狼煙」

乞うご期待！

???これが勝利の鍵だ！??? ?

ギア・クロス
【歯車交差】

???????????????? ?

（ガオガイガーの予告BGMがBGMです）

番外交差

【歯車の世界】

信念を貫いた闇科學者史上

超天才で最高な闇科

何かすごく書きやすかった…だと…？

短いです。

軽いファンフィクションです。

番外交差

【歯車の世界】信念を貫いた闇科學者史上

超天才で最高な闇科

??これは遠い…

「???さんツッ!

」???さん!?

??遠い世界の記憶。

「大丈夫…ツかい?…智?くん、?緒ちゃん

「何で…何で貴方がここに!?

??”彼”は生き様を否定されながらも…

「グッ…!闇科學者を嘗めちゃイケナイねえ…さ…」

『貴方…敵じゃ無かつたの!?』

??ベリアル・ドール副葬処女を消されても…

「オレア…俺の欲求ねがいで動いてんさ…勿論、相棒の願いでもある…かな」

「でもっ…！」

?? 欲求と願望を達成させんとした…
ゆめ もくひょう

「? 春くん… 闇科学者史上、超っ天才… 闇科学者なんだぜ? オレア
よオ
でも… 副葬処女も居なかったら機巧魔神も、ただの鉄人形じゃない!」
ベリアル・ドール アスラ・マキーナ

?? 愚直なまでに純粹に運命に抗ってきた男がいた…

「翡翠、薔薇輝、蒼鉛… 何時まで寝てんだ… さっさと起きやがれ」
ロードナイト ビスマス
「無駄だよ天才闇科学者さん! この三体は… な!？」

?? その想いはとても純粹で…

「機巧魔神の制御が…!？」
アスラ・マキーナ
「さて、そろそろ幕引きだ…!」

?? とても狂った願いだった。
いかれた

「「闇より純粹なる影より出でし??」」
せかい
『嘘!?! 詠唱!?!』

「それも演操者^{ハンドラー}が!？」

?? その願いは…

「「?? 其は、科学の神々を導く壮麗たる影!」」
「あれは…? 鐵!？」
「いいえ… あれは…」

?? 『手に届く範囲の人々の笑顔を護る』

「始まりの機巧魔神^{アスラ・マキーナ}…」
「力を貸せ! 【神代鐵^{オリハルコン}】 ツツツ! …!」

?? 『可能な限り… 出来る限り手の届かない人たちも笑顔にする』

「グギッ… つ… ふうううううう!」
「やはり… 副葬処女^{ベリアル・ドール}も居ない状態でアレ^{オリハルコン}を操作するのは危険過ぎる」

?? 叶う筈もない願いを抱えた男は…

「!… じゃあ??? さんは!」
「結果が如何あれ、死ぬわ」

『そんな…！？？さん！！』

？？自分の道に^{人生}ケジメをつけようとした。

「大丈夫さね莫迦共オ！例えこの身が破滅しても！魂が碎けようと！俺がテメエらの魂に刻み続ける！」

？？男は咆哮^{ほえ}する

「この、闇科學者史上！超っ天才の！最ッッ高闇科學者！！」

？？自らの名を、高らかに…

「【鍊姫^{れんじ}・ゼクウエル・黒峰^{くろみね}】の名をなァ！！！！いくぜ神代鐵^{オリハルコン}！！」

？？男は猛る^{さげふ}

「^{ラグナロク}黄昏の力”！！！！」

？？全ての終焉を望んで…

? アカシックレコード 164, 268, 952, 784, 475,
 852, 063 卷【鍊姫・Z・黒峰】より抜粋?

番外交差

【歯車の世界】信念を貫いた闇科學者史上

超天才で最高な闇科

アカシックレコードの番号は結構適当です。

誤字脱字あればご連絡を

b y 作者月詠

第三交差 鬼の狼煙【前編】（前書き）

P V 3 ' 2 8 3、ユニーク 1 ' 0 5 2！

ありがとーござえやさアアア！

誤字脱字在らばご連絡を！

b y 作者月詠

第三交差 鬼の狼煙【前編】

?Side??

夢を、見ていた…

俺にそっくりな白衣を着た男が、命を張ってまで、親友や我が子…
弟子達を護った、不器用に気高い男の夢を…

「ん…？」

「気がついた様だな？」

声のする方向へ首を動かすと、薄蒼髪碧眼で全体的に青系の服で統一した女性が傍に居た。

「アンタは…？」

「君の躰を借りた存在…とでも言っておこう」

「もしかして…あの時俺と並走していた奴か」

脳裏に浮かぶのは俺の顔の横でフヨフヨと飛んでいた水色の光。
彼女は自身がその光だと言う。

「君のおかげであのデカ狼を倒せたし、君の能力の一部も分けて貰

「つたしな」

能力の一部…？

「君の中に入って、記憶の中から相応しい名前の能力だ。

アスラ・マキーナ
【機巧魔神「翡翠」を召還し、操る程度の能力】だ」

アスラ マキーナ
「機巧、魔神…」

その言葉を聞いた瞬間、俺は徐に殺風景な部屋を出る。

出た先には、大きな湖が在った。

「一体どうしたんだ…！？」

水色の女性が何か言っているが、俺には届いてなかった。

「……「闇より純粹な影^{せかい}より出でし…？」」

「詠唱！？それにこの詠唱…まさか…！？」

再び脳裏に映像…いや、静止画の連続が流れる。

黒き機巧魔神を持ち、共に戦った親友兼助手。

その傍に居た血液を炎に変える異能を持った助手兼教え子。

その他の機巧魔神と演操者たち…

そして……？

「其は、科学の神々を導く壮麗たる影……！」

……？？？魂で感じた……生涯の相棒。

「再び……俺に力を貸してくれ！アイシャ……いや、
【神代鐵】……！！！」

俺の影が徐々に広がっていく……そして、その影から這い出る様に見
様によって色が変化する機械の腕が出る。
そして肩、頭、胸と順番にその姿を現す、俺の相棒。

「久し振り、
神代鐵」

……？？？一日千秋の想いでお待ちしております。My master
r……？？？

軽く頭を下げる4m大の機巧魔神、
神代鐵。

「随分と待たせた様だな…」

??? 私の体感時間で凡そ26年二ヶ月と四日、17時間24分22秒程待たされました???

「再会して六分で嫌味か。ちくせう（汗）」

???それが私ですので…???

フフフ…と微笑む（声）神代鐵。
すると、先程の女性が現れた。

「いきなり飛び出したかと思えば微笑ましく会話か？少年」

…微笑みが引きつっているのは気のせいだと思いたい。

???これは失礼しました。私は”彼”の影であり従者…神代鐵と申します????

「ああ。申し訳無いが私も名無しでな。一応、氷の精だ」

成る程…この女性の気配に妖気が混じっていた理由を納得した。

???了解しました。…申し訳ありませんが翡翠を出してくれませんか????

嫌味と低姿勢のこのギャップはどうなんだ？

「??? 嫌味はmasterのみななので、ご安心を???」

安心できねーよ。寧ろ困るわ！

「ではいくぞ。」

「闇より静けき氷海に眠る???」

氷精の女性の影が拡がる。

「其は科学の音色おとに凍てつく影！」

そして現れるのは薄黄緑色で僧侶姿フリストの機巧魔神アスラ・マキナである。

「出でよ、翡翠」

「??? 御意???」

「見た目からして後衛なのに壁役のキャラだよな普通。翡翠って」

> 神<

「??? 否定はしませんよ。否定は...???」

目を逸らすな。こつち見て話せコラ。

> 翡<

「??? 何時もながら失礼だな。神代鐵???」

> 神<

「???何を言いますか。私が失礼じゃないんです、貴方が失礼を誘発させてるんです!???」

無茶苦茶な責任転嫁しやがったコイツウウ!

閑話休題

「取り敢えず名前が欲しいな。何時までも『アンタ』や『君』じゃ
読者がこんがらがるからな」

「今何だか変な含みが…」

> 神<

「???気にはいけませんよ?それが世界の真理小説デスカラ???」

> 翡<

「???主従揃ってメタるなよ…???」

「????少年・妖精?・機巧魔神思考中…」

> 神<

???? 結果発表〜! ????

「丸一日掛かったぞオイ」

気付けば翌日の朝でしたー…なんて……

笑えねー…orz

「確認だ。

少年の名前が

【連史^{レンジ}】。

私の名前が

【チルノリア・アイスエイジ】だ」

俺の名前の由来は

『並び【連】なる歴【史】』だそうだ。

チルノリア…長いからチルでいいな。

本人曰く適当で構わないと言ったので頭に浮かんだ名を言ったら一発OK。

無茶苦茶喜んでたよ。うん。

ここから先150年くらいは作者が力尽きるのでダイジェストでいくぞ。

その150年で出会ったのが、
気弱なのに上位木霊の

【きこり】

地下生活する虫妖怪の

【ハグリ】

はぐれ鬼の

【火烈】

悪戯好きで姉御肌な蜃気楼の妖怪

【アーシェ】

代表的な事件(?)が…例えば、きこりが大事に育てた木の実をハグリが食べてきこりが涙目でハグリを木の鞭で叩いてたり…

アーシェが寝惚けて俺の頭に噛り付いたり…

火烈が酔っ払ってアーシェの尻触って半殺しにされたり…

きこりが寝惚けたチルに凍らされたり…

きこりが滑った拍子に火烈の股間にスライディングヘッドバットして火烈が物凄く悶絶して…

ハグリが酔っ払って触手で俺と火烈以外を十八禁みたいな光景にしたり…

え？

神代鐵と翡翠？

二体は偶に出て自然を堪能してるよ？

そして150年が経ったある日：火烈から大山の鬼が勢力を拡大する為に大山の天狗を潰すという情報を得たのだった。

???連史Side end...???緊急速報????

大山の天狗を侵略しようと目論む鬼たち。

そこへ連史たちは待ったを掛ける。

しかし侵略を止めない鬼たちの中から現れた人物は...？

次回、東方交差人

第四交差

『鬼の狼煙【後編】』

乞うご期待！

????これが勝利の鍵だ！????

鬼神きし

おつらん
黄藍

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

第三交差 鬼の狼煙【前編】（後書き）

原作キャラ出てるの、分かりますよね？

設定上、現在のチリノリアは年季がある分頭脳明晰です。

よって、若干口調がみんな大好きけーねさん口調なのです。

では！

サラダバー！

第四交差 鬼の狼煙【後編】（前書き）

P V 6 ' 6 3 4、ユニーク 2 ' 0 6 7！

ありがとうございます！

誤字脱字在ればご連絡を！

b y 作者月詠

第四交差 鬼の狼煙【後編】

「穩便に事を進めたいんだけど…」

「勢力拡大は二の次じゃ！ワシは強い者と戦えれば良しなのでな！」

いや、話聴けよと…

読者諸君も何が何やら混乱しているだろう。

事の発端は30分前まで遡る??

俺は、きこりを膝に乗せてのんびり昼寝をしていた時の事だった。

「だ、旦那〜！ヘンタイ！ヘンタイでさア！」

「誰が変態だ！この一角獣いっかくけだもの！！」

「ひでえ！？…ああじゃなくて、大変なんですよ旦那！」

「何だ？どうせまたハグリがアーシェ姉に弄られてんのか？
だったらほつとけ。死して屍拾う者無しだ」

「あっさり！？…って、そうじゃないんでさア！三つ先の山に居る

強え鬼たちが勢力拡大の為に、こつちまで攻めて来てるんでさア」

「…チルとアーシェ姉を呼んで来い」

人里の最近の急成長は気になるが、それは差程脅威じゃない。

ここ周辺で人間以外で集団行動するのは俺たちか、この辺で一番大きい山に住まう天狗達ぐらいだ。

最初に被害を受けるのは天狗達、次に食糧的な意味で人間が襲われるだろう。

最近の妖怪は人間との関係性が重要な事をまるで知らない。

人間の恐怖の権化こそが妖怪だろうに…悩ましい。

そんでもって、責任者出せー！ってなって、ワシじゃぞー！となった訳だ。

そして今に至るのだ。

「又シ…人間の形をしておるが違うのう。
又シの様な妖怪は初めてじゃ」

眺める様に俺を見てくる鬼の長。

「ふっふっふっ。聞いて驚け！」

あ、ハグリ。

ついて来いなんて言っただけだ…

「見て笑え」「ドゴツ」ずびましえん！」

デメエか火烈。

それにそのネタは危険だ！

「あー…コホン。俺は所謂『一人一種』の妖怪でな。

…そんな事より、アンタらの計画は邪魔させて貰うぜ？どうせ天狗の後は人間だろ？」

「無論じゃ。我らは鬼…妖怪は人間を襲う者じゃ」

当たり前と言わんばかりに爆乳を張る鬼の長。

デケーなオイ。

「俺らは人間の恐怖で生まれたみたいな存在…存在理由の根源根絶やしにされてたまるかって」

「そうか…ならば逸れ妖怪共、ここで潰えるが良い」

鬼の長の周囲に居た屈強そうな鬼男達がやってくる。

「しゃーこらー」

「潰してやる！」

「死に晒せ！」

何か亀　が居るぞ…

「あわわ！こつち来るよレン兄ちゃん！」

何か背中重いなと思ったらお前かよきこり！

「きこり降りてろ…お前は十を数える。その内に終わらせる」

「う、うん！」

俺はきこりの頭を撫でてから鬼三人へ向かう。

「十を数える内か…舐められたものじゃな。此奴らはワシの次に強い鬼じゃ。
侮ると死ぬぞえ？」

「十…九…」

「ご心配どうも。だが…」

「八…七…」

一人目の鬼の背後に一気に移動して延髄蹴り。

「六…五…」

蹴った方向とは逆に回転して脊椎の全身が痺れる秘孔を肘で突く。

「四…」

最後の一人の真正面に立つ。

？三…

驚いている隙に正中点を全て突き…

？二…

胴体に掌底を添えて…

？一…

気で弾いて三人の鬼を纏めて吹き飛ばす！

？零。

『……………』

相手方の鬼は全員啞然。

『……………』

チルやアーシェ達は当然と言わんばかりの顔で誇っている。

「随分と弱かったぞ？いや、我が強いのか？^{オレ}」
絶賛ギル様モードですよ。

ふっふっふ！

「…随分と慢心しておるな、ヌシは…」

「フンッ…慢心せずして何が王か！」

言ってみたかったこの台詞！！

「面白い…面白いぞ！ワシの名は鬼神キン黄藍オウラン！！屈強なる鬼を統べる王よ…！！」

「ほう…あの程度で『屈強』か。あれぐらいなら火烈でも蹴り一つで吹き飛ばせるぞ？」

向こうで「ちょー旦那ア！？俺を巻き込まないで下せえ！」って言うてるが無視だ。

「ふむ…ワシの軍勢よりも、逸れ妖怪が強いと言っのかの？」

「当たり前だ。何時までも格下や同格と戦っていては鈍るだけ…常に自らよりも格上に挑み続けるのが強さに繋がる。

おっと…駄弁が過ぎたな」

人間換算で一世紀半跨いでるから説教臭くなってしまったな…猛省せねば。

「いや、なかなか理に適った理論だぞい。各言つワシも自分より弱いのかおらなんだ。

…そういう訳で、手合せ願うぞ？逸れの王よ」

「良いだろう。王が許可する…我オレを楽しませろよ！？鬼の王よ！！」

Side end???

???^{作者} 第三者Side...

動かぬ静寂の中、最初に動いたのは…

?バツ!

両者同時であつた。

鬼の王…黄藍が右腕を鈍く風を切る音で奏でながら逸れの王…連史を殴ろうとするが、連史はそれをいなす。

黄藍はいなされた勢いで倒れるフリをして、そのままハンドスプリングで真後ろに居る連史を馬蹴りする。

しかし、いなされはしなかったが両腕を交差して防がれた。

黄藍は空中を蹴る技法…通称『虚空瞬動』^{こくうしゅんどう}で不安定な体勢から通常まで持ち直す。

「殴れば柳、蹴れば巨木……埒が開かんぞい」

「とある国には『合気』と呼ばれる相手の力を利用する技法がある。力だけでは一切勝てぬぞ?鬼の王」

「ほざけ、逸れの王。」

…不本意じゃが、能力を使うか」

「なん…」

言い終わる前に連史は空に打ち上げられていた！

「ぐっ…！？」

（何だ今のは！？目視出来なかった！？）

「これこそ、ワシの能力…【限界を超える程度の能力】じゃ。」

鬼の王になってから使わせたのは巨象の大群に襲われて以来だぞい。
良かったのう逸れの王。ヌシは一生に一度見れるか見れないかの能力を体験出来るのじゃからのう」

打ち上げられた連史の上に黄藍の影が被さる。

「ッハアアッ！！」

「がアっ！」

黄藍は稲妻の様な速度で踵を連史の腹に叩き付ける。

「『鬼技・妖炎弾！！！！』」
きぎ あやかしほむらだま

黄藍は追撃する様に妖力を凝縮させた巨大火炎弾を、大きく開かれた左手からオーバースローで放たれる。

連史が居るであろう場所から火柱が立ち、空に浮かぶ黄藍の横を通

り過ぎる。

（…少しは期待したのじゃが、どうやらぬか喜びだったようじゃな。
…馬鹿者）

連史を倒した黄藍の顔には、歓喜でも落胆でもなく…悲哀が浮かんでいた。

しかしそれは杞憂に終わる…

？闇より静けき氷海に眠る…？？

未だ火柱が立つ大地から詠う様な声が響く。

その声に、ある者は当然とばかりに笑い、またある者は驚愕し、さらにまたある者は安堵し、歓喜した。

？？其は科学の音色^{おと}に凍てつく影？ツ！

強大な魔力と共に、紅蓮の炎だった火柱は一瞬にして一柱の氷柱と化した。

（何とも…非常識なまでの能力じゃのう）

冷や汗をかく黄藍の表情に焦りは無く、純粹に楽しむ子供の様な顔がそこにはあった。

「良い…良いぞ逸れの王！そうで無くては詰まらないというもの…
さあ！再開しようぞ！我らの『闘争^{けんか}』を！！」

鬼の王が見る先には大地に悠然と佇む逸れの王。

未だ喧嘩の炎に燃える両者の視線が重なり、二人は笑い合う。

「悪くねえ…悪くねえな。拳と拳合わせて殴り合って…」

「鬼として生を受けて、生まれてこの方負けは無かった…」

「鼻血垂れ流しても、満身創痍で体が動かなくても…」

「故に自らを最強と、無敵と信じて疑わなかった」

「本気で喧嘩したのは数える程だったな…だから……」

「何時しか横に並ぶ者は無く、人知れず孤独を感じていた。だが…
…」

「「オレ（ワシ）と対等以上に戦える、お前（お主）と出逢えたこの一瞬を、拳で讃えようぞ（讃えようぞ）！鬼の王（逸れの王）ッ
！…」」

そして再び鬼の王と逸れの王は、互いの出逢いを祝して拳を合わせるのだった。

「はあはあ…つぐ、はあ…はあ…」

「ぜえ…ぜえ…ふう…」

戦いは昼夜問わず行われ、両者は半年間の末にようやく片膝を着いた。

「はあはあ…ちょ、お主、反則じゃろ…！？三日でワシの能力に追いつきおって…ワシの自尊心はズタズタじゃぞ…！」

「ぜえ…五月蠅い！こちら何度も意識落としかけたんだ、それぐらい大目に見ろ…それにもうちよつと羞恥心持ちやがれ！色々見えて困ったんだぞ！」

「わざとじゃ」

「んだとこのトン痴鬼^{チキ}が！」

「ちょっと待たんか！今激しく否定したいあだ名じゃぞそれは…！」

「だったら隠せ！」

「お主の反応が楽しめぬだろう…！」

「知るかボケ!!」

何とも底の低いケンカとなっていた…

「なんとも眼福な光景ですぜエ…」

「かつちゃ〜ん。それに同意するのは、れんちゃんぐらいだからやめといたほうがいいわよ」

「何でさア姐さん。だって好いおっp姐さん!そっちにその関節は曲がらなああああああつ!!」

逸れ組と鬼の女性陣からお仕置き（ギャクサツ）されている火烈は、この際は放っておこう。

「大体な!お前戦うには色々危ない格好だろうが!胸とか股とか全身とか!」

「これは所謂芸術じゃ!」

「襲われるだろ!負けたら!」

「滅多に負けんわ!」

「あ、あるのかよ!?」

「もとい、無敗じゃ!」

「紛らわしい！」

「何じゃ、ワシに惚れたか？（2828）」

「……………ハッ！」

「鼻で笑われたのじゃ！？」

未だ底の低いケンカをする二人。

しかし体は満身創痍なので動くに動けないのである。

しかし…

「ほら、黄藍様。流石にそろそろお終いにしましょう」

「な！？不知火！？お、降ろすのじゃ！ワシとあやつとの決着は未だ…」

「ほーら旦那、そろそろ帰りやすぜ」

「降ろせば火烈！子供扱いすんな！」

お互いの保護者（的存在？）に担がれて別れたのだった。

「次は負けないのじゃあああ——！！」

「知るかボケえええ——！！」

だが、逸れと鬼の王は知らない。

互いが、腐れ縁どころの騒ぎじゃなくなる因縁になることを…

緊急速報

連史と黄藍の戦いから二年、連史は人里の急激に成長する姿に驚愕する。

連史は能力を生かして急成長した人里に侵入し、とある少女に出会った。

次回、東方交差人

第五交差

『天才と転再』

乞うご期待！

これが勝利の鍵だ！

ヤマトロ エイリン
【八意 永琳】

第四交差 鬼の狼煙【後編】（後書き）

今回はいよいよ二人目の原作キャラの登場です。

天才と『転』生して『再』び生を謳歌する者…

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6236m/>

東方交差人

2011年10月7日00時48分発行